

# 柿の実を払いのけてよ初演かな

劇場の『コケラ落し公演』のポスターを見て

「このポスターをデザインした奴は馬鹿だね『かき』と『こけら』の漢字の違いを知らないな。わからないなら仮名で書いておけばいいのに、知ったかぶりするからこうなる」なんていう悪口をどこかで聞いたことはないだろうか。私は聞いたことはないが言ったことはある。

「こけらおとし」の「こけら」はよく話題になる漢字である。「こけら」の字形が「柿」によく似ているからである。だいたいフォントベンダーで「こけら」の字を用意していない会社がある。そうだろう、今のご時世「こけら」などという漢字や言葉を使うのは「こけら落し公演」か宮大工くらいしかないのだから。そんな文字を自社の標準字種として作るのはなんともったいないことが。

「こけら」とは木っ端、削りくず、木の札などをいう。

「こけら板」とくれば建材である。ヒノキやマキなどのやわらかい木を薄く削ってウロコ状に屋根に貼り付けていく工法に使う建材である。茅葺き、藁葺き、瓦葺き、などと同じようにコケラ葺きという建築工法、乃至は建材に関する言葉である。「鱗」もコケラという。

「こけらおとし」とは「工事の最後に屋根などの木屑を払い落とすところから新築劇場の初興行（広辞苑、岩波書店）」ということだ。この場合の「コケラ」は「木屑」である。

さて字形だが、右表のようになる。参考までに植物の「かき」もついでに載せておく。

「かき」正字(No.1)の旁は音が「シ」、「巾」

の2画で、意味は「あきなう、人が集まって物品を売買するところ」である。字形は「ナベブタ」を書いてその下に「巾」を書いたイメージだ。

「こけら」の俗字(No.4)の旁は音が「フツ」、「巾」部の1画で、意味は「ひざかけ、まえだれ」である。字形は「巾」の縦棒を上に長く伸ばして、それに横線を加えたイメージだ。

要約すれば、旁の上部と下部が付いていれば「コケラ」、離れていれば「カキ」である。「かき」

No.	文字	音	画数	意味	JIS区点	字形的特長
1	柿	シ	9	柿の正字	JIS-X0208-1面19区33点	ナベブタ+巾
2	柿	シ	8	柿の本字	JIS-X0213-1面35区57点	
3	柿	ハイ	8	こけらの正字	JIS-X0213-2面14区98点	
4	柿	ハイ	8	こけらの俗字	JIS-X0212-2面35区03点	巾の縦棒を上に長く伸ばし横線を交叉する。

と「こけら」の違いをご理解いただけたらどうか。

ところで、「こけら」の漢字を使う場合は、正式には「**杣**」を使うべきで「**柿**」は俗字なのだし、「かき」との誤読を避けるために使うべきではないと私は思うのだが、いかがだろうか。JISでも X0212 (補助漢字) は略字「**柿**」を載せていたが、X0213 では正字「**杣**」を採用している。

「こけら」「かき」の字形の違いに関しては、世上、知っている人は知っているくらいでよいのだが、この陰に「フツ」と「シ」を混乱させるもっと重要な事件がひそんでいるのである。

それは「肺」である。この文字の音は「ハイ」、訓はない。(大和言葉では「ふくふくし」だが、こんな訓をつける人は今はいないだろう)。

そう、音は「ハイ」なのである。だから傍の形状は「フツ」であるはずではないか。実際「肺」の旧字「**肺**」の傍は「コケラ」の正字の傍(No.3)と同じものである。

「肺」は総画数が 8 画である。ところが小学校では傍を「シ」で書くように指導している。しかしこの書き方では総画数が 9 画になってしまうのだ。

なぜそうなったか。当用漢字表の例示文字を書いた人が「肺」の傍を書くときに「シ」の字形を書いてしまったからである。参考にした活字文字がそう書かれていたのがあったからだろう。

好意的に解釈すれば、教育漢字の範囲内で細かい書き方の違いを統一し子供に理解しやすいよう配慮した結果なのかもしれない。「シ」も「フツ」も同じエレメントに統一したのだ。

いま教育界で教育漢字の字体の基準は文部省告示「小学校学習指導要領」の学年別漢字配当表である。この資料の上では「肺」である。おかげで国内の漢和辞典まで影響を与えて、だいたいの漢和辞典の「肺」の例示文字はあえて 9 画で載せ、「漢字」では 8 画だが、「教育漢字」では「9 画」となっているという言い訳めいた書き方をしている。

開き直って言えば、日本の常用漢字の世界では「肺」は 9 画である、と認識すればよいことである。国語ではない漢文の世界でもこの文字を使えとは言っていないのだから。

日本人の頭の中で「フツ」と「シ」の違いが曖昧になったのにはもうひとつ、明朝活字のデザ

イン上の処理があると思う。明朝のデザインでは本来横画とその下にくる縦画が離れている場合、縦画の頭の打ち込みをとり横画につけてしまう場合がある。特に本文用といわれる細い書体にこの傾向がある。

韓国姓の「曹」は「曹」の異字体であるが、これを「一/由/日」と書いてしまった明朝体を見たことがある。これなども明朝デザインの影響で、字体の観点からでなく、付く付かないは明朝デザインの任意とする、と見られているからではないだろうか。

「肺」の旁中央の縦棒が途中で切れていようが繋がっていようが、私たちがこの画線構成を見て、思い浮かぶのは「肺」以外にない。

「肺」は「肺癌」「肺結核」「人工肺」などで日常的によく知られている漢字だから、読む際に画線構成を細部にわたって確認することもない。条件反射的にさっと読み過ぎるのみだ。

だからこの字形から読み違いはないと断言してよい。現にこれによって肺の手術だったのを間違えて別の臓器を切ってしまったと言うような事件が起きたとは聞いてない。

しかしこうした字形の改変は次のような問題が発生させる。

「麻」の旧字は「**麻**」である。楷書では「**𦵏**」を「林」の形に書くのを許容している。だから教育漢字では「麻」の部首を持つもの、例えば「**磨**」は「磨」である。

この許容を常用漢字にとどめておこならいいのだが、勢いあまって「**麻**」を「麻」と書いてしまう。これはいけない。「**麻**」は「しびれ」であり、「**麻**」は「淋病」である。誤診の原因になりかねない。もっとも「**麻酔**」は今は「**麻醉**」と書くように教育されているから医療事故はないだろうけど。

私の本意ではないが、漢字の最大の目的、つまり情報の伝達のために使用するのは中学校までに習得しなければならない常用漢字、もっと下って教育漢字に限ればよい。あるいは「この文書は『常用漢字表』内の漢字しか使っていない」と刊行物の先頭で宣言すれば読む方も安心して多少ファジーな気持ちで読み進める。この範囲内であれば学校で義務教育で習得すべく教育しているのだから、読み間違えて問題があってもそれは受け手の問題である。

再度言おう。私は「こけら」を「**柿**」と書くのが嫌いである。仮名で書くか「**柿**」と書きたい。なにも懐古趣味で古い字がいいなどと言っているのではない。私が心配するのは将来「こけら」が「かき」となってしまうことである。

「コケラ落し：コケラを意味する漢字が「カキ」に類似しているため間違えられたもので、正確には『カキ落し』という。『カキ落し』とは新築劇場での初興業をいう。昔は劇場の傍には必ず「人をかき集める」という洒落で柿の木を植えたものだが、その実が屋根やひさしの上に落ちてしまう。客を迎える前にそれを払い落とすのが、まず第一の仕事だったからである。柿の実を掻き落とすの掛詞で洒落である」

などという辞書の解説が将来でてこないとはいえないではないか。(念のため、柿に人集めの縁起があったかどうか私は知らない。いま、私が作った駄洒落である。)

漢字の誤用によって大和言葉の「こけら」が消えてしまうのが日本人として忍びない。

この著作権は岡和男に帰属します。  
©Kazuo Oka 2000